【仮訳】東京1964から東京2020へ、パリ2024の視点から見たパラリンピック競技大会：違いの尊重から技術進歩による達成へ

シルヴァン・フェレズ
（フランス・モンペリエ大学）

1940年のオリンピック開催都市が決定したのは，オスロで1935年に開かれた国際オリンピック委員会（IOC）の会合であった。当時，東京は極東初のオリンピック開催を目指していたが，スカンジナビア諸国は，立候補都市であったヘルシンキを支持していた。東京は，未来の同盟国であるドイツとイタリア（後者は自身の立候補を直前にキャンセルした）の支持を得て，この争いに勝利した。1937年，日本の中国侵略を受け，中国政府と緊密な関係にあった米国は，1940年のオリンピックをボイコットすると警告した。IOC 会長はオリンピックの開催都市変更を検討し，1938年７月，ヘルシンキに変更する。その後，第二次世界大戦が勃発し，同大会は中止となった[1]。

1964年，東京オリンピックの開催により，日本は再び平和国家の仲間入りを果たすこととなる。当時，オリンピックと同じ開催地における対麻痺アスリートのための大会開催を申し出た都市は，東京大会の４年前に開催された1960年のローマ大会のみだった（1948年以来ストーク・マンデビルで毎夏開催されていた大会の開催地を変えるという形で）。2021年に開催されたパラリンピックの開会式の中で，東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の橋本聖子会長は，「パラリンピック」という名称が初めて使われたのは，1964年の東京大会でのことだったと語った。つまり，東京はパラリンピックを２度開催した初めての都市となった[2]。

本稿は，フランス人の目から見て，1964年と2021年の大会がいかに異なるものだったかを検討する。第一章では，1964年の大会と，大会拡大についての議論（対麻痺患者のみが対象となっていたものをすべての障がい種に拡げることを目的としたもの）について取り上げる。第二章では，東京大会に対する新型コロナウイルス感染症の影響に関して考察する。最後に第三章では，パラリンピックを（テクノロジーの発展などにも関連した）インクルージョンの取り組みや個々人の違いの尊重を推進する牽引力とするための，これまでの発展について注目する。2021年９月６日，東京パラリンピック閉幕直後に，フランスの日刊スポーツ紙である『L'Équipe（レキップ）』は，次のように報じた。

「イベントは終わったが，実際には，これが始まりだ。東京パラリンピックの閉会式で東京の冒険物語は幕を閉じ，次はパリの番だ[3]」。

1．1964年，東京：「すべての障がい者」に開かれた大会に向けた退役軍人の取り組み

フランス切断者スポーツ協会（ASMF：Amicale sportive des mutilés de France）設立の３年後，同協会会報1957年11月号では「世界の負傷者とスポーツ」というコラムの中で，初めて日本についての言及があった[4]。国立身体障害者更生指導所（現在の国立障害者リハビリテーションセンター）の高瀬安貞所長の覚え書きに言及し，このコラムは，日本においては戦時中に，戦争で四肢を失った軍人が残った手足のリハビリができるよう，陸軍や海軍の病院でスポーツが採り入れられたと記している。「金属製の脚」を装着し，手足を失った人々は軍事訓練（行進，自転車，フェンシング，登山）に参加し，「中には日本最高峰の富士山（3,778メートル）に登った者までいる」。国立身体障害者更生指導所は専門医による戦傷者のための施設として，リハビリと健康の向上だけでなく，「自信を与え」「専門的トレーニングを提供する」ことを目的としていた[5]。

このコラムによれば，1951年以降，障がい者のための福祉法成立以来，中央政府や地方自治体が推し進める政策により，障がいのある一般人のための科学技術やリハビリテーション施設の分野で，大きな進展が見られた。「障がい者のためのスポーツ」は，数少ないスポーツが一部の地域でのみ実施されていたにもかかわらず，一般の障がい者のための会合は定期的に開かれており，東京都の後援を受け，東京の聴覚・視覚障がいのある人々のための組織が主催する総合競技大会が，毎年秋に開催されていた。国立身体障害者更生指導所においては，スポーツが活動の中心に据えられており，その目的は，身体的強靭さを獲得し，「競争心」を育てることだった。水泳については，「ポリオの後遺症に苦しむ者の中には，恐怖心を克服し，十分な自信を取り戻しさえすれば，サポートなしに水の上に浮かんでいられる者もいた」[6]。視覚障がいのある者も，しばしば相撲や柔道など，さまざまなタイプの「格闘競技」を行ったり，ロープに沿った真っ直ぐなコースを走ったり，中央の柱に結び付けられたロープの端を持って円を描いて走ったりすることもあった。また，特別なルールや用具を用いて，卓球や野球，バドミントン，バスケットを行った。

1－1．障がい者のためのスポーツの国際化に向けた動き

1961年２月，世界歴戦者連盟（WVF：World Veterans Federation）日本支部の理事

であった沖野亦男は，WVF 本部からの実質的な支援を要請するため，パリを訪れた[7]。この旅で，沖野は，ストーク・マンデビル大会開催の礎を作った神経外科医であり，ローマにおける第一回「パラリンピック大会」（1960年）の創設者であるルードヴィヒ・グットマン博士と面談をする。ローマ大会が，21カ国から400名の対麻痺アスリートを集めて成功を収めたことを受け，東京で２回目の同様の大会を開くことについての検討が進められていた[8]。WVF は，この取り組みに参加することを強く望んでいた。1961年，国際ストーク・マンデビル大会委員会（ISMGC）は，1964年に東京で大会を開催することを決めた[9]。日本は，初の対麻痺アスリート（訳注：正しくは身体障がいアスリート）のためのスポーツ全国大会開催の推進を通じて，これに対する準備を進めた。

1961年の夏，ASMF 事務局長が，その少し前からフランスが関与していた「障がい者のためのワールドスポーツムーブメント」に対するフランスの態度を明らかにし，その中で，フランスは「障がいの種類や出自で区別をしないグループ分け」を支持するとした[10]。このようにして，フランスは「あらゆる障がい種」に開かれた大会開催への道筋を付けたのだ。フランスが望んでいたのは，「ストーク・マンデビル大会や次の大会（1964年の東京大会）などの国際イベントの選手選定に，障がい者であれば誰であろうと候補者として名乗りをあげられるようにすること」だった[11]。1962年の夏，1964年のパラリンピックを「あらゆる障がい種」に開くべきとの声が，再び ISMGC に寄せられた。だが，グットマン博士は，それは時期尚早だと考えていた。1963年７月，29名のフランス人対麻痺アスリートがストーク・マンデビル大会に参加し，48個のメダル（金メダル20個，銀メダル15個，銅メダル13個）を持ち帰ったが，このときすでに，東京大会を視野に入れていた[12]。

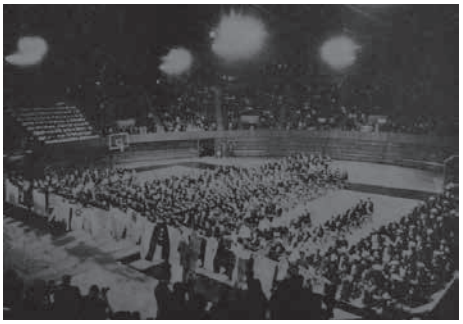
東京大会に向けて準備を始めるにあたっては，（リハビリではなく）スポーツ競技だという観点に立ち，（対麻痺の人々だけではなく）あらゆる障がい種を大会に統合していこうというビジョンが，フランスの基本的なスタンスとなっていた。同時に，1950年代末に ASMF と WVF の主導で立ち上げられた，障がい者向けスポーツに関する国際ワーキンググループにより，国際身体障害者スポーツ機構（ISOD）が創設された。「フランスと世界歴戦者連盟の力で1964年に創設された ISOD は，障がい者にスポーツの機会を提供するすべての国の結集を目指す国際的スポーツ団体である」[13]。ISOD には12カ国からの代表者が参加していた。初代および２代目の会長，カーティス・シャンパン（Curtis Champaign）とノーマン・アクトン（Norman Acton）は，WVF 出身者だった。ストーク・マンデビル大会では四肢の切断者が「その他」として，たとえば視覚障がいのある者と一緒にグループ分けされていた中，ISOD は，ISMGC の改組により創設された国際ストーク・マンデビル車いす競技連盟（ISMWSF）と共に，東京大会の開催に積極的に関わっていた。

1960年のローマにおける第一回パラリンピックの開会式には，英国保健相が列席し，次のような言葉を述べた。「この場のアスリートを何よりもまず患者として紹介することで，主催者は，おそらく意図せず，障がい者を『“一般”社会とは別の社会に属す，医療専門家からの特別な支援が必要なグループだ』という過去の温情主義的なスタンスと似た考え方を広めてきた」[14]。1964年の東京大会では，（ISMWSF など）医師たちにより創設された団体と，退役軍人が関係する団体との間の新たな力関係が見られた。フランスやドイツと同様，日本では後者が遥かに大きな力を持っており，戦争中に負傷した者（特に四肢切断者や視覚障がい者）が多数いた。そのため，ISMWSF とグットマン博士の勧告に従い，すべての障がい種が参加できる大規模な大会は，またも対麻痺のアスリートのみを対象とした1964年のパラリンピック大会と並行して開催されることとなった。

１－２．1964年東京大会に対するフランス人の見方

1964年９月，フランス選手団がパラリンピックに向けて出発する直前に「身体的障がい者のためのフランススポーツ連盟」（FSHPF：Sports Federation for the Physically Disabled of France）の会報最新号の表紙には，東京の写真が掲載された。その中で，同連盟の会長は「第二回国際パラリンピック競技大会に FSHPF がフランスチームを送ることができるよう，懸命に努めてくれたすべての人に」感謝した[15]。1964年12月の同会報に掲載された五つの記事は，すでに閉幕した東京パラリンピックについて取り上げた。第一の記事は，陸上，バスケットボール，フェンシング，ウエイトリフティング，水泳，卓球，アーチェリーに出場したフランス人20名の結果順位と，金メダル４個，銀メダル２個，銅メダル７個を獲得した選手，12名の入賞と金サーベルを手にした選手を詳細に紹介するものだった[16]。第二の記事の中で，FSHPF の会長は次のように語っている。「第18回オリンピック競技大会，そして我々障がいのあるアスリートにとっては第二回パラリンピックが閉幕した（ここで『パラリンピック』という言葉は，『対麻痺の人々のための競技大会』という意味ではなく，『オリンピックに比する大会』という，より広い意味で使われている）。過去にフランスが参加してきたさまざまな国際大会を思い返しても，これほど華やかでありながら，大会が組織的に展開する上で求められるシンプルさを維持できた大会を私はこれまでに見たことがないと認めざるを得ない。（中略）日本の組織委員会の皆さん，有難う。1964年の東京大会のことは決して忘れません」[17]。

第三の記事には，写真が添えられていた[18]。これらの写真には，開会式で行進するフランス代表団や，中村裕博士（大分県の国立別府病院整形外科科長で大分県身体障害者体育協会会長）を前にする日本人アスリート，バスケットコート内での閉会式の写真などが含まれている。



画像１，２，３：Second souffle, 4, 1964, p.6, p.9

第四の記事は，駐日フランス大使，フランソワ・ミソフ（François Missoffe）が主催したレセプションパーティーについてのものだ[19]。この記事の写真には，キャプションも付けられている。

画像４：「魅力的な日本人女性に囲まれた我が国のアスリート３名」Second souffle, 4, 1964, p.14

最後の記事は「極東の儀礼に慣れる難しさから……上品な日本人女性が道行く姿を見る喜びまで」と題され，キャプション付きの２組の写真シリーズが添えられている。第一の写真シリーズは，団長であるフィリップ・ベルト（Philippe Berthe）を含めた４名のフランス代表団が「中華料理レストランで箸に四苦八苦している」姿を捉えたものだ

（画像５）[20]。第二の写真シリーズは，見せ物の様子を撮影した４枚組で，「伝統的舞踊」というキャプションが付いている（画像６）[21]。

画像５

画像６

異国情緒やオリエンタリズムを色濃く映したこのような視点は，同会報の1965年第一号でも見られるもので，この号では「オリンピック都市・東京滞在の思い出と特殊性」[22]が特集されており，（靴を脱がなければいけないことやトイレの使用についてなど，人との交流や衛生上の決まりごとと関連した）西洋人旅行者が直面する文化的ギャップについての逸話が数多く取り上げられていた。また同会報は「北原特命全権公使」[23]を迎え，モーリス・エルゾーグ青年・スポーツ相主催で Salons de Rhin-et-Danube[24]において開かれた「1964年12月17日の記者会見・カクテルパーティー」についても伝えている。

画像７：「政府からの賞状と共に首相からの小切手を M. モーリス・ヘルツォーク（M. Maurice Herzog）青年・スポーツ相から授与されるフィリップ・ベルト FSHPF 会長」[25]

全体として見れば，1964年のパラリンピックは，フランスにとって国際的な場で自国

の主張を強く押し出す機会となり，それが1970年代に入り，異なる障がい種のアスリートをパラリンピックに参加させ[26]，リハビリのための取り組みという考えから，オリンピックと同様にスポーツで競うことに価値を置くことへのシフトにつながった[27]。

２．東京2020大会から東京2021大会へ：パンデミックと共に

新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延に直面し，東京2020大会を中止もしくは日程の変更するかどうかについて，何度も議論が起こった。大会を2021年夏に延期するという選択肢は議論を呼ぶものだった。７月23日から８月８日までの日程で，オリンピックは無観客で開催された。この大会後，新型コロナウイルス感染拡大に関する指標は大きく悪化した。この状況から，８月24日から開始予定のパラリンピックの開催については，最後まで議論の的となった。実際のところ，パラリンピックの準備と実行は，政治的利害に強く影響された。この政治的利害とは，大会組織委員会や行政当局がいかに感染症の危機に対処するかに結びついていた。

２－１．最後の瞬間まで危ぶまれた大会

2021年８月15日から９月15日にかけて「パラリンピック」と「新型コロナウイルス感染症」両方に言及したオンライン上のすべてのフランス語記事を検索・分析することで，前述した政治的利害についての洞察を得ることができた。同期間，計1,131件の記事が見つかり，８月16日，８月24日，９月６日の三つのピークが見られた（図１）。８月24日のピークが最も記事数が多かったが（152件の記事），これは丁度パラリンピックが開幕したタイミングに当たる。９月６日（61件の記事）は，閉会式の翌日に当たる。

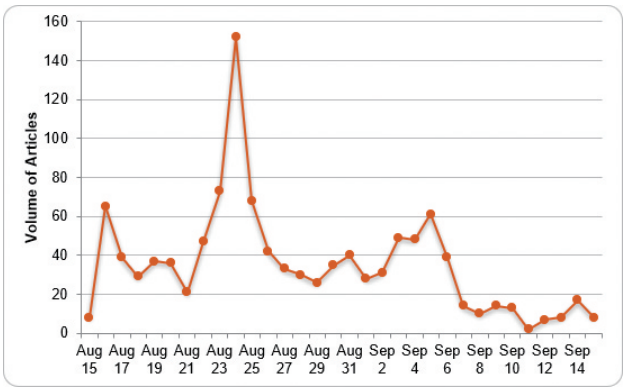


図１　「パラリンピック」と「新型コロナウイルス感染症」に言及した記事（2021年８月15日～９月15日）

これより以前の８月15日，週刊誌『Le Point』のオンライン版は「新型コロナウイルス感染症：オリンピックとパラリンピックの間に日本では感染が拡大」という記事を掲載した。同日，オンラインメディア Directinfo は「パラリンピック2020：観客を締め出した大会となることが不可避に」というタイトルの記事を掲載した[28]。この翌日，記事件数は大幅に上昇したが（全部で65件），同日，日本政府は，一部の児童・生徒を除き，東京とその近郊のパラリンピック会場への観客の入場を禁止すると発表したのだ[29]。感染状況の悪化が，その後数日にわたって確認された。８月20日，パラリンピックの聖火が東京に到着した一方で，都の病院は患者で溢れるようになり，組織委員会は，大会は「非常に困難な」状況の中で開催されることになると語った[30]。フランスのニュース専門放送局 FranceInfo のウェブサイトは，日本における記録的新型コロナウイルス感染者数により，パラリンピックに影を落とす不確実性について報じた[31]。このような中，Radio Télévision Luxembourg（RTL）のウェブサイトは，「日のいずる国，日本において，新型コロナウイルス感染者数が記録的レベルに達する中，日本の当局は，東京2021パラリンピックをどうすることが適切なのかについて未だ決断できずにいる」と報じている[32]。

８月21日，検査数の増加や移動制限を含む，より厳しい感染症対策の措置を発表したと，組織委員会の動きがメディアで報じられた[33]。その翌日，AFP 通信はこれらのより厳しい措置が取られることを確認し，また，日本において感染者数の拡大から強い懸念が生まれていることを報じた[34]。パラリンピック開幕の２日前の８月22日には，大会組織関係者の陽性者数が（８月12日以降）131人に達した。うち直前24時間の増加数は30人であり，２名のアスリートもその中に含まれていた[35]。日刊紙『Libération』は，「パラリンピックの開幕を迎え，最悪の第五波」と伝え，同紙はさらに，東京では「８月２日から15日の間に，新型コロナウイルス患者を受け入れる病院に対し3,927件の救急搬送要請があったが，その60％である2,373件は，病床に空きがないことを理由に受け入れを断られた」[36]と伝えた。８月23日付の同紙は，日本で強まる疑問の声を反映したものとなった。「15日前に閉幕したオリンピックは，この感染者数増加にどの程度影響を与えたのか」を問う声である。その答えがどうであろうと，誰の目から見ても明らかなのは「新型コロナウイルス感染症の新たな波が世論を二分する中，日本の大会組織委員会はパラリンピックを中止せよとのプレッシャーを受けている」ということだった[37]。

パラリンピック開幕前日，このようにして日本は新型コロナウイルス感染症第五波の渦中にあった。再び大会の開催について再検討が行われる中，組織委員会は，直前に強化された感染予防対策をしっかり守るよう，すべての人に訴えかけた[38]。大会を開催するために東京都はベストを尽くした。（エリートに対する強い抵抗を伴う）極めて緊迫

した状況や無観客で大会を開く必要性があったにも関わらず，パラリンピックの認知度を高めたのだ[39]。組織委員会は，競技が始まればメダルの数が感染者数を忘れさせてくれることを望んだのだろうか[40]。

２－２．パンデミックに対するスポーツ側からのアプローチ

フランスで発行部数最大の日刊紙であるスポーツ専門紙『L'Équipe』は，８月23日付のソフィー・クリュゼル（Sophie Cluzel）首相付障害者担当副大臣のインタビューを皮切りにパラリンピックの報道を始めた。クリュゼル副大臣は「観客がいないことは，もちろん残念です」と語り，「残念ですが，大会を開く代償なのです[41]」と続けた。その翌日，トーマス・バッハ IOC 会長の来日により日本で巻き起こったメディア上の議論について同紙は伝えた。新型コロナウイルス感染拡大がピークを迎え[42]，小池百合子東京都知事が都民に対し，９月12日までは外出を控えるよう要請する中，バッハ会長が自主隔離からの除外を申し入れたことが「大きな非難」の的となった。特記しておくべきことだが，早くもオリンピック開催時の７月，バッハ会長は「周りの人間も含め，現実が全く見えていない人物」[43]と見なされるようになっていた。これは，高級ショッピング街である銀座でポケットに手を入れたまま散歩し，道行く人と自撮りをするバッハ会長の姿を捉えた一連の写真が問題視されたことがきっかけだった。パラリンピックの開会式出席のために自主隔離を行わずに済ませようという彼の試みは怒りを買い，また，この時期，さまざまなスタジアムで行われる競技を児童・生徒が観戦できるようにするという案を，大多数の親や校長は批判していた[44]。『L'Équipe』は，次のように結論付けている。

> このとげとげしい雰囲気は，アスリートが過ごすバブルに影響を与えてはならない。日本人は，（彼らが非難する）国のリーダー達と（彼らが尊敬する）アスリート達が違うことはよく分かっている。本屋に行けば，パラリンピックを特集したガイドブックを多数見かける。それらは，地元のスターアスリートを紹介し，ゴールボールやボッチャなど珍しい競技種目について解説するものだ[45]

これを除けば，新型コロナウイルス感染症やその対策について，『L'Équipe』はほとんど言及していない。８月24日，これらが一連の問題や困難と関連づけられて報じられた。「予算の大幅増加，パンデミック，１年の遅れ，日本人の強い拒否感」のすべてが一つに混じり合っている，と記事には書かれている[46]。この記事には，次のような写真が添えられていた。「７月23日の東京オリンピック開会式において，パラリンピックア

スリート土田和歌子に聖火を手渡す２人の日本人医療従事者」[47]。パラリンピック開催に当たり，記者は次のように記している。

> まるでデジャヴだ。日が経ったにも関わらず，またも同じ内容の発表が繰り返されている。オリンピック聖火リレーの中止，無観客での大会開催，緊急事態宣言と関連した保健衛生上の制限，日本全土での新型コロナウイルスの感染拡大……。そしてこのことが，東京パラリンピックや今日予定されている開会式に対する情熱が欠けたムードを醸し出している。パラリンピックの姉とも言えるオリンピックがそうだったように，何か魔法のようなことが起これば別の話になるが。スポーツやアスリートの素晴らしさ，そして会場に観客がいなくとも，スポーツやアスリートがかき立てる，人から人へと伝わる感動のおかげで，２週間前に終わったばかりの2021年のオリンピックは，最終的には息をのむような素晴らしいものとなった[48]

８月24日，日刊紙『Le Monde』は，「コントロールの利かない感染症の危機の中」パラリンピックが始まったと報じた[49]。一方，経済紙『Les Échos』は，第五波の最中，「東京・国立競技場のスタンドに観客がいないままパラリンピックが開幕した」という事実に焦点を当てた[50]。ニュージーランド代表団は，ウイルスを警戒し，開会式への参加を見送ることさえしたと『Le Parisien』紙は報じている[51]。８月25日，パラリンピック競技がスタートする中，フランスメディアは，AFP からの特報として，すでに一部地域で実施されている感染防止のための措置が，日本国内のより広い地域に拡大される予定だと伝えた[52]。３日後の８月28日，大会組織委員会は新たに22名の陽性者が判明したと発表した。これにより，２週間の期間でのパラリンピック関係者の陽性判明累計件数は200名を超えた[53]。８月30日，『Forbes』誌のオンライン版は，（アスリートではない）大会関係者が感染のために病院に運ばれたと報じた。また新たに15名の感染が報じられ，その中にはパラリンピック村に滞在するアスリート２名も含まれていた[54]。

９月３日，パラリンピック大会会場のアクレディテーションカードを持つ関係者のうちの陽性者数は計275名となった[55]。９月４日，コロナ陽性者の濃厚接触者となったオーストラリアの車いすバスケットボールチームの選手に対し，より厳しい感染対策プロトコルが適用されることとなった[56]。閉会式前日の９月６日には，24時間の陽性者新規確認件数が６件となり，累計件数は316件となった[57]。９月９日，大会組織委員会の公表では，オリンピックで547名，パラリンピックで316名の計863名が陽性者となったという。その中にはアスリート41名，報道関係者50名，組織委員会の主要メンバー29名も含まれている[58]。

２－３．スポーツニュースと政治ニュース

パラリンピックが開催された13日間（８月24日～９月５日），大会関連のスポーツ情報は，新型コロナウイルス感染症関連報道にかき消されがちだった。新型コロナ関連報道は，いずれにせよ日本の主要政治ニュースであり続けた。８月27日，未使用のモデルナ製ワクチン160万回分の接種を見合わせると厚生労働大臣が発表し，「パラリンピックに対する懸念」がある中，危機感が広がることとなった[59]。フランスでは，翌日，左派系新聞『Libération』が「感染症対策上のスキャンダル」が起こったことを伝えている[60]。９月２日，週刊新聞『Courrier International』が「いくつかの新型コロナウイルスワクチン容器で不純物が見つかり，日本政府はそれらが作られたものと同じロットの製品すべてをリコールすることとなった」と報じた[61]。このような中，９月３日には，菅義偉首相が９月29日の自民党総裁選に出馬せず，首相の座にも留まるつもりはないと発表したことを，AFP が驚きをもって伝えた。「批判の多い新型コロナウイルスへの対応が理由で，人気低迷に苦しむ」[62]菅首相は次のように語った。「莫大なエネルギーが必要なコロナ対策と同時に選挙戦を戦うことは不可能であり，自民党総裁選挙には出馬しないこととといたしました」[63]。

９月，パラリンピック閉会式終盤では，コロナ対策として器具や施設を消毒するボランティアの姿が映像で流され，彼らの熱心な仕事ぶりに注目が集まった。France Television で閉会式の中継が行われた際，組織委員会は厳格な手順と数多くの検査を実施することにより，この危機を最小限に抑え，アスリートの安全を保障したと解説者は語った。だが，政治専門ジャーナリストの見方は，スポーツコンサルタントの見方ほどポジティブなものではなかった。実際，フランスの全国紙は「パフォーマンスと感染危機の間で」揺れた日本のパラリンピックへの最終評価として，対照的な厳しい見方をしている。９月５日，『Le Monde』紙は，この閉会式のテーマ「Harmonious cacophony（違いが輝く世界）」を皮肉な論調で取り上げ[64]，ベルギーのフランス語新聞『Le Soir』は「まあまあのメダル数，それだけだ」と報じた[65]。もちろん公衆衛生上の壊滅的事態は避けられたものの，９月６日付のベルギーの地方紙『La Meuse』が報じたように，大会は「無秩序，あるいは素人臭さ」を感じざるを得ないものとなった[66]。

３．東京2021大会からパリ2024大会へ：テクノロジーが描く未来とインクルージョン

オリンピックのブルーのマスコット，ミライトワと対をなす，東京2021パラリンピックのピンクのマスコット，ソメイティは，伝統と現代性が調和しつつ混じり合うイメー

ジを人々に与えるものだ。この「耳が桜（染井吉野の古種）でできたキュートな地球外生物」[67]は，想像上の未来技術と植物由来の神話的象徴の擬人化とが合わさったものだ。また，ソメイティは「競技場に立って初めて自分の超人的パワーに気付く少し内気な子ども」のイメージを醸し出している[68]。

３－１．希望・テクノロジー・協働が通底する演出をとおして，違いを謳い上げる

2021年８月24日の開会式について，日刊スポーツ紙『L'Équipe』は簡潔に伝えている。同紙は，開会式には謹厳さが感じられたとし，次のように伝えている。「離陸と飛行というテーマのショーでは，車いすの少女が主役だった。彼女は布袋寅泰が作曲した映画『キル・ビル』のテーマ曲をロックバンドが演奏しても，堂々としている……」[69]。競技場近くで開かれた大会開催反対デモについては，軽く触れられたのみだった。

France Television の再放送において，この開会式は「風と翼というテーマ」に確かに沿ったものだと解説者は語った。ショーの最初のシーンは，明らかにサーカスを模したものだった。実際にそのシーンでは，17世紀の日本で生まれたアイデアである「風を起こす」機械が用いられていた。この機械上には「巨大な自動装置」があり，その数多くの歯車は，障がい者を含む多くの人々の調和の取れたアクションを通じて動いていた。その目的は「飛行機を飛ばす風を生み出すこと」だと解説者は説明した。その背景には，機械仕掛けの遊びをとおして空気を生み出す仕組みがあり，観る者を想像上の技術革新へといざなった。

だが，このショーはそれだけに留まらない。ここで繰り広げられるシーンは，希望の誕生，あるいは希望の再生のシンボルでもあるのだ。実際，多くの者が集まってできた集団によるこのテクノロジー・プロジェクトの目的は，何よりもまず，息をしていない者を動かす，あるいは再び動かすこと――つまり生命と動きを取り戻させることだ。このようにして，物質的・技術的イメージを通じ，生命と社会は再び融合することができる。そこに少女が登場する。彼女は片翼の車いす飛行機に乗っている。「パラ」空港とその風を起こす機械は，彼女が離陸するための一歩を踏み出せるようサポートする必要がある。技術の力と人々の集団，みんなの知恵の結集から生まれたエネルギーに背中を押され，少女が空高く飛び立ったところでショーが終わる。そこに映し出されるのが開会式のスローガン“We have wings！(「私たちには翼がある」)”だ。フランスの解説者はこれを「インクルージョン」「パフォーマンス」「未来を変える」という三つのキーワードでまとめた。

９月５日のパラリンピック閉会式のテーマは「すべての違いが輝く街」だった。ショーの最初の場面では，パラリンピックが東京都の変容に与える影響がイメージとし

て表されていた。リサイクル素材でできたカラフルなビルや建物がボランティアによってスタジアムに運ばれてくる。これは人々が暮らし，そして生きることのできる街の象徴だ。それは誰もが違いを表現しながら永続する街だ。次の場面では，あたかも新たな街の誕生を完成させるためであるかのように，ボランティア達が力を合わせて巨大なタワーを立てようとする。カラフルでお祭り気分に満ちたこのショーは，再び技術上のイノベーションに光を当てた。だが，都会の喧騒とは対照的な別の場面が登場する。こちらは，より自然派的なアプローチの場面だ。これは水滴のメタファーをベースにしたものだ。水滴はあらゆるタイプの誕生のシンボルであると同時に，自然の姿のシンボルでもある。最後に水滴は，この街の秩序だった多様性に統合されていく。それは，カラフルで調和に満ちたアンサンブルの中で，あらゆる違いを祝う時間だった。

この閉会式ではまた，パラリンピック・ムーブメントに合わせて行われた，インクルージョンを支援するための“I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）”プロジェクトで優れた取り組みを行った三つの学校が，アワードを贈呈された。全体として見れば，東京パラリンピックの開会式と閉会式は，あらゆる年齢，あらゆる障がいを代表した式典となるよう，緻密に準備されたものだった。そこでは子どもも高齢者（そしてその介護者）も，男性も女性も，身体・知的・感覚障がいのある人々も，手動車いすに乗る人も電動車いすに乗る人も，積極的に何らかの役を演じていた。社会や生活に関わるテーマや現代性（特にテクノロジー）と伝統をベースにしたストーリーに留まらず，これは大会を通じて生まれたレガシーを残すことを目指すものだった。

３－２．パリ2024大会のレガシーを築き，東京2021大会の経験を活かす

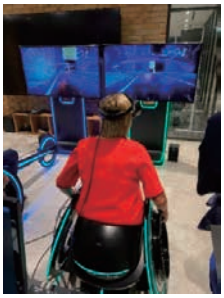
ソフィー・クリュゼル首相付障害者担当副大臣の日本訪問には明確な目的があった。障がい者のインクルージョンというテーマに関し，日本の経験を活かしてパリ2024大会のレガシーのあり方を検討することだ。日本到着の翌日，そして開会式前日でもある８月23日に，クリュゼル副大臣は『L'Équipe』のインタビューに応じた。来日の目的は，フランス代表団（東京大会での22競技中19競技に出場する138名のアスリートと15名のガイドランナー）のサポート[70]であると共に「パリ2024大会の開催に向けて，他国のカウンターパートと会い，『アクセシビリティの観点から模範となる』日本の交通機関を視察するためだ」と彼女は語った[71]。その一方で，フランス代表選手団として35個のメダルを獲得するのが目標だということも明確に語られた[72]。また，同副大臣は，パリ2024大会を，交通機関やスポーツ施設のアクセシビリティ向上に向けて「加速させる力」とすべく準備しているとも語った。この文脈において，2024年大会のオリンピック選手村は「ユニバーサル・アクセシビリティの現実世界における実験場」として計画されて

いるクリュゼル副大臣は次のように述べている。「私たちはパリを真にインクルーシブな街にするというレガシー実現のため，これに高い関心を払っています。そうすることで未来の街づくりに向けての大きな飛躍が可能となるのです」[73]。

しかしながら，パラリンピック期間中の２週間，『L'Équipe』ではメダルを獲得したフランス人アスリートや2024年大会におけるメダル予想に紙面が割かれ，この課題についてはほとんど触れられなかった[74]。しかし，ソフィー・クリュゼル副大臣は，このテーマを温め続けていた。８月29日，自身の Twitter で，クリュゼル副大臣は在日フランス大使館（@ambafrancejp）の二つのメッセージをリツイートした。一つ目は，澤邊芳明氏が創業したサイバースポーツ開発企業訪問についてのものだ。３枚の写真（画像８，９，10）には，同副大臣がサイバー・ボッチャを始めようとする姿[75]や，（車いすレースのために）サイバー・シミュレーション・ゴーグルを着けている姿が写っている。ツイートには次のようなキャプションが付けられている。「スポーツの実践がよりインクルーシブなものとなるよう，テクノロジーが差異をなくしてくれる」。

画像８，９，10

同日，フランス大使館は二つ目のツイートとして「より多くの人にスポーツを楽しんでもらえるよう，ロボット工学やバーチャルリアリティ，新素材，ファブラボ，３Ｄプリンティングなど，よりインクルーシブな社会に向けて取り組むテクノロジーイノベーション企業の関係者とソフィー・クリュゼル副大臣が面談した」と投稿した。同様に，クリュゼル副大臣は何枚かの写真（画像11，12，13）付きで別のメッセージを投稿した。この投稿は，フレデリック・ヴィダル（Frédérique Vidal）高等教育・研究・イノベーション大臣によってすぐにリツイートされた。「#TechForGood｜二つの大会の間に，よりインクルーシブな社会に向けて取り組むエンジニアや科学者，アーティストと面談すると共に，『サイバー・パラスポーツ』のデモンストレーションに参加しました」。



画像11，12，13

9月6日，インドの卓球選手バビナベンハスムクバイ・パテル（Bhavinaben Patel）[76]の練習用ロボットとのポジティブな体験を，国際メディアが次のように報じた。「新型コロナウイルス感染症の世界的拡大によりパラリンピックに向けた練習に支障が出た際，彼女にとって，インドスポーツ局が提供してくれた練習用ロボットが完璧なパートナーとなった。パテル選手によれば，彼女が獲得した歴史的な銀メダルは，そのロボットのサポートがなければなし得なかったものだ」[77]。パラリンピック閉幕の翌日，『L'Équipe』は，2024年に向けた展望を提示することにより，インクルーシブな社会というレガシーを議論の中心に再び据えた。そこでは，パリ2024大会組織委員会のトニー・エスタンゲ（Tony Estanguet）会長が次の事実を強調している。

> パラリンピックは小規模な大会ではない。組織委員会の取り組みの方向性すべてに，パラリンピックの要素が含まれるよう，私たちは努めている。同じ一つのチームがオリンピック・パラリンピックの準備を進めている[78]

パリ2024大会では，オリンピックとパラリンピックとの間での共通シンボルの利用を大幅に増やす予定だ。史上初めて，この大会では同一のロゴが使われることとなる[79]。

この統一化の動き以外にも，東京の大会運営についての詳細な評価が行われた。パリ2024年大会のスタッフが大挙して来日したが，彼らの目的は，2024年大会の前に，実行すべき「作業の規模を見積もる」ためだった[80]。エスタンゲ会長は，パラリンピックのさまざまな競技を適切に開催するため，今後整備が必要な交通網の計画管理の重要性が

印象に残ったと語った。パラリンピックを利用して，パリの公共交通アクセスをすべての人にとってよりよいものにしたいというフランス当局の意向が，これを力説する要因となっている。重要な問題となるのは，一定のメトロ主要駅を，誰もがアクセス可能なものにできるかどうかとなろう。

インクルージョンというテーマについて，パリ2024大会のレガシー構築のためのもう一つの主要な取り組みは，人々に感動を与える物語を生み出し，それを広く報じることになるだろう。とりわけ，そのゴールは「パラスポーツをより多くの人々のためのものにする」ことを視野に入れ，「東京でメダルを獲得した選手たちを介して，障がいと共に生きる若者たちに影響を与えていく」こととなろう[81]。この点について，エスタンゲ会長は，大会のスポーツとしての側面の推進と，パラリンピックの特長に対する理解向上については，すでに大きく前進しているとし「パラリンピックアスリートのパフォーマンスがよりよく理解されるためには，大会期間中にそれをより明瞭に示していく必要がある。このことは，リオよりも東京において，より実現されたと私は考えている。しかし，改善の余地はまだある。そしてまた，準備の初期段階において，フランスの一般国民を変えていく必要があるだろう」と述べている[82]。

ただし，スポーツパフォーマンスの基本的価値の観点からオリンピックとパラリンピックをより一体化させたいというこの望みは，違いに対する配慮を排除するものではない。エスタンゲ会長は，パラリンピックに関連して「さまざまな価値観」を強調するコミュニケーションが生まれることを期待し，次のように語っている。「パラリンピックはスポーツ以上のものだ。今回は，私が観客として観戦するようになって３回目のパラリンピックだ。パラリンピックとはスポーツであると同時に，人生のレッスンだ。パラリンピックは素晴らしい。魂を揺り動かすものだ。未だ改善の余地があるかもしれないが，私たちは改善をやり遂げなければならない……」[83]

おわりに

パリから見る1964年の東京パラリンピックは，一見非常に遠い昔の話であり，オリエンタルな異国趣味に彩られ，それがステレオタイプに溢れた見方につながっていたように思われる。だが，身体障がい者のためのスポーツについての見方にも，同様の傾向が見られる。第二次世界大戦による大きな影響から，日本とフランスはいずれも国際的な退役軍人団体との関係性が強く，あらゆるタイプの障がいのあるアスリートのパラリンピック参加を支持していた。それまでのパラリンピックは，脊髄損傷のアスリートのみが参加でき，ストーク・マンデビル大会の創始者である神経外科医ルードヴィヒ・グッ

トマン博士が提唱するように医学上のリハビリをベースとするものであった。

半世紀を経た2021年パラリンピックは，あらゆる障がい者に開かれた大会を目指すプロジェクトと，「リハビリテーション」ではなく「競技スポーツ」を基本とするビジョンの成功を証明するものだった。ここから，フランス大会準備に当たっての展望を理解するための三つの視点が浮かび上がってくる。第一は，自国のアスリートのパフォーマンスをモニタリングし，彼らが獲得したメダルの数をカウントするという『L'Équipe』紙での扱いで見るように，パラリンピックが真の意味でのスポーツイベントだと見なされるようになったことだ。第二は，東京大会で次々と起こったイベントや組織面に対する（フランスメディアによる）関心が，2024年のパリにおける次のパラリンピック開催と関連していることだ。第三は，すべての開催都市が直面してきた制約，特に経費の膨張抑制や，持続可能な開発，新たに設けた競技施設の再利用などについての解決策を見出すために，東京の経験を活用することが目標となることだ[84]。

これらの制約は，2000年代に入り徐々に主流となってきた，大会の物質的・社会的レガシーに関する次のようなビジョンから生まれたものだ[85]。すなわち，大会開催に当たっては，市民を必ず関与させ，「政治的・社会的」変革の梃子となるようにし[86]，「技術的大変革」を推進する[87]，というビジョンである。このような中，「インクルージョン」は，パラリンピックがその実現に努める，誰もが認める価値観になってきた。今や，追求すべきは「あらゆる障がい種のインクルージョン」ではなく，「違いを称える」ことだ。現実にそれは困難であり，まだ検討が足りない事項もあるものの，この点について開催都市は模範となるべく努めており[88]，開催国は，それに関してリーダーシップを発揮しようとしている。

2021年９月５日の閉会式の後，パラリンピック期間中，France Television のコンサルタントを務めた元パラリンピック水泳選手サミ・エルゲダリ（Sami El Gueddari）は，彼自身の言葉で東京大会成功の鍵を次のようにまとめた。つまり，日本政府からの干渉がなかったこと，日本についてのステレオタイプな見方がなかったこと，規範の厳格な遵守で知られてきた日本で規範からの解放の兆しが生まれたことである。彼にとって，日本は「困難な状況に平静をもたらす者」であった。スタジオにマイクを返す前，彼は次のような仮説を語った。「パラリンピックこそがオリンピックの未来の形ではないだろうか」。

注

当翻訳は仮訳であり，正文は日本財団パラスポーツサポートセンター紀要17号掲載の原文『From Tokyo 1964 to Tokyo 2021, the Paralympic Games Seen through the Lens

of Paris 2024: From the Celebration of Differences to Achievement Through Technical Progress』を参照（http://para.tokyo/17-SylvainFEREZ.pdf）。

参考引用文献

1 J.-P. Augustin and P. Gillon, *Les Jeux du monde. Géopolitique de la flamme olympique,* Paris, A. Colin, 2021.
2 F. Dabadie, «Tokyo joue le jeu quand même», *L'Équipe,* 24/08/2021, p.10.
3 «*It is a particular moment because we are realising that it is our turn,* said Etienne Thobois, the general director of Paris 2024, smiling from Japan. *We are doing it with a little apprehension, but a lot of determination*», M. Ventouillac, «Paris prend la main», *L'Équipe,* 06/09/2021, p.26.
4 *Revue des Mutilés de France,* 8, 1957.
5 In this context, amputated individuals were more particularly encouraged to practice cycling (due to the possibilities for moving around that it provided, but also for its health benefits). Thus, a team of 26 men (12 of whom were amputated from a leg, and 9 from an arm) covered a distance of 119.2 km in 7h25, a performance that is "comparable to normal people' s" (*Idem*).
6 *Idem*.
7 D. J. Frost, «Tokyo's Other Games: The Origins and Impact of the 1964 Paralympics», *The International Journal for the History of Sports,* 29(4), 2012, pp.619-637.
8 H. R. Cassirer (UNESCO), «Les infirmes et le sport», *ASMF Magazine,* 23, 1961.
9 M. Boubée, «Rapport de la Réunion du Comité International de Stoke Mandeville Games», *ASMF Magazine,* 22, 1961. Boubée represented the ASMF (for which he was the technical advisor) at this meeting that also included M. Guttmann (England), M. Maglio (Italy), M. Tricot (Belgium) and Captain Tjebbes (Holland).
10 J. Martin, «Sections de province», *ASMF Magazine,* 23, 1961.
11 *Idem*.
12 *ASMF Magazine, 31,* 1963.
13 Leclerc, «Assemblée générale de l'ISOD (3-6 décembre 1981)», *Second souffle,* 19, 1982, p.8; «［ISOD］offered opportunities for those athletes who could not affiliate to the International Stoke Mandeville Games: visually impaired, amputees, persons with cerebral palsy and paraplegics» (http://www.paralympic.org/the-ipc/history-of-the-movement).
14 D. J. Frost, «Tokyo's Other Games: The Origins and Impact of the 1964 Paralympics», *The International Journal for the History of Sports,* 29(4), 2012, p.634.
15 P. Berthe, «Merci», *Second souffle,* 3, 1964, p.2. Aside from the State and Public Authorities, and most prominently the State Secretary for Youth and Sports, the president of the federation also mentioned more than twenty partners.
16 «Le palmarès français à Tokyo», *Second souffle,* 4, 1964, p.2.
17 P. Berthe, «18es Olympiades – 2es Jeux paralympiques», *Second souffle,* 4, 1964, p.5.
18 «La délégation française à Tokyo», *Second souffle,* 4, 1964, pp.6-11.
19 The latter became the Minister for Youth and Sports between 1966 and 1968, following Maurice Herzog, the State Secretary for Youth and Sports at the time of the Tokyo Games.
20 «From the difficulties to adapt to the rites of the Far-East…to the pleasure of watching gracious Japanese ladies go by», *Second souffle,* 4, 1964, p.16.

21 *Idem,* p.17.
22 *Second souffle,* 5, 1965, p.23.
23 *Second souffle,* 5, 1965, p.12-14.
24 A military circle within which the French movement was constituted in 1954.
25 *Idem,* p.12.
26 D. J. Frost, «Tokyo's Other Games: The Origins and Impact of the 1964 Paralympics», *The International Journal for the History of Sports,* 29(4), 2012, pp.619-637.
27 S. Ruffié, S. Ferez, E. Lantz, "From the Institutionalization of 'all disabilities' to Comprehensive Sports Integration: The Enrolment of France in the Paralympic Movement (1954-2012), *The International Journal of the History of Sport,* 31 (17), 2014, pp.2245-2265; S. Ferez, S. Ruffié, N. Bancel, "From Sport as an instrument in Rehabilitation to the adoption of Competitive Sport: Genesis of a Delegatee Sports Federation in France for those with Physical Disabilities (1954-1972)", *Sport History Review,* 47(2), 2016, pp.146-171.
28 https://directinfo.webmanagercenter.com/2021/08/15/jeux-paralympiques-2020-le-spectre-du-huis-clos-desormais-ineluctable-presse/
29 https://news-24.fr/le-japon-interdira-aux-spectateurs-les-sites-paralympiques-de-tokyo-et-des-environs-a-lexception-de-certains-ecoliers/
30 https://news-24.fr/les-organisateurs-disent-que-la-situation-est-tres-difficile-alors-que-les-hopitaux-sont-etires-par-les-cas-de-covid-19/
31 https://www.francetvinfo.fr/jeux-paralympiques/jeux-paralympiques-2021-la-flamme-arrive-a-tokyo-record-de-cas-de-covid-19-au-japon_4743365.html
32 https://www.rtl.fr/sport/autres-sports/jeux-paralympiques-2021-la-competition-est-elle-menacee-7900062869
33 https://news-24.fr/les-organisateurs-des-jeux-paralympiques-resserrent-les-regles-relatives-aux-virus-alors-que-les-cas-augmentent/
34 «Jeux paralympiques 2020: les mesures sanitaires renforcées par les organisateurs», AFP, 22/08/2021; «La flamme paralympique à l'épreuve des vents du Covid à Tokyo», AFP, 22/08/2021.
35 https://news-24.fr/30-autres-tests-positifs-aux-jeux-paralympiques-alors-que-les-organisateurs-adoptent-des-mesures-plus-strictes/
36 «Japon: à l'aube des Jeux paralympiques, une cinquième vague dévastatrice», *Libération,* 22/08/2021.
37 https://news-24.fr/covid-19-les-jeux-olympiques-de-tokyo-ont-ils-provoque-une-recrudescence-des-infections-au-japon-nouvelles-du-monde/
38 https://fr.euronews.com/2021/08/23/a-la-veille-des-jeux-paralympiques-de-tokyo-une-cinquieme-vague-inquietante-des-cas-de-cov
39 «Tokyo joue le jeu quand même», *L'Équipe,* 23/08/2021.
40 «Jeux paralympiques 2020: le Covid, l'ombre au tableau des médailles», AFP, 23/08/2021.
41 S. Cluzel, «Sur les Jeux Paris, on a de très gros enjeux», *L'Équipe,* 23/08/2021, p.30.
42 4 700 cases per day in the city on average since the beginning of August.
43 F. Dabadie, «Tokyo joue le jeu quand même», *L'Équipe,* 24/08/2021, p.10.
44 In a context where the Minister of Education had banned the organisation of any nature trips throughout the summer.
45 F. Dabadie, «Tokyo joue le jeu quand même», *L'Équipe,* 24/08/2021, p.10.
46 C. Nony, «Entretenir la flamme», *L'Équipe,* 24/08/2021, p.2.

47 *Idem,* p.3. On 24th August, a similar picture can be seen during the Paralympics opening ceremony, where a doctor, a nurse, and a prosthetist cover the penultimate relay of the Torch.
48 C. Nony, «Entretenir la flamme», *L'Équipe,* 24/08/2021, p.2.
49 «Les Jeux paralympiques de Tokyo débutent sur fond d'une crise sanitaire hors de contrôle», *Le Monde,* 24/08/2021.
50 «En pleine cinquième vague, le Japon donne le coup d'envoi des Jeux Paralympiques», *Les Échos,* 24/08/2021.
51 https://www.leparisien.fr/sports/JO/jeux-paralympiques-la-nouvelle-zelande-renonce-a-la-ceremonie-douverture-par-crainte-du-covid-19-24-08-2021-SDAL22HRUJHOLGJA2WUOH3BNNE.php
52 «Covid-19: le Japon va encore étendre ses mesures sanitaires», AFP, 25/08/2021.
53 https://www.nouvelles-du-monde.com/les-cas-de-covid-19-lies-aux-jeux-paralympiques-de-tokyo-depassent-les-200-en-2-semaines/
54 https://www.forbes.fr/business/les-jeux-paralympiques-de-tokyo-signalent-la-premiere-hospitalisation-dun-patient-atteint-de-covid-19/
55 https://www.tap.info.tn/fr/Portail-Sports-FR/14350904-paralympiques-2020
56 https://pressfrom.info/fr/actualite/culture/-1151337-coronavirus-effraye-pour-les-rouleaux-dans-tokyo.html
57 https://news-24.fr/total-de-316-cas-signales-aux-jeux-paralympiques-six-au-cours-des-dernieres-24-heures/
58 https://www.aa.com.tr/fr/sport/jeux-olympiques-et-paralympiques-de-tokyo-863-cas-d-infections-à-la-covid-19-recensées/2360286
59 https://www.nouvelles-du-monde.com/le-japon-retire-16-million-de-doses-de-vaccin-covid-contre-la-peur-de-la-contamination-alors-que-la-propagation-du-covid-provoque-le-chagrin-et-lanxiete-paralympique/
60 «Impuretés dans des vaccins Moderna au Japon: enquête ouverte après deux morts, de nouveaux lots retirés», *Libération,* 28/08/2021.
61 «Chiffre du jour. Le Japon rappelle 1,6 million de doses du vaccin de Moderna», *Courrier International,* 02/09/2021.
62 «Japon: fin de partie pour l'éphémère Premier ministre Suga, plombé par sa gestion du Covid-19», *L'Express,* 03/09/2021.
63 «Japon: le Premier ministre Suga abandonne la partie», *Libération,* 03/09/2021.
64 «Entre performances et crise sanitaire, un bilan des Jeux paralympiques contrasté pour le Japon», *Le Monde,* 05/09/2021.
65 https://www.lesoir.be/393121/article/2021-09-05/jeux-olympiques-et-paralympiques-vu-de-tokyo-un-bilan-passable-sans-plus
66 «Vu de Tokyo, un bilan passable, sans plus», *La Meuse,* 06/09/2021.
67 F. Dabadie, «Tokyo joue le jeu quand même», *L'Équipe,* 2408/2021, p.10.
68 *Idem*.
69 C. N., «L'envol des Bleus», *L'Équipe,* 25/08/2021, p.20.
70 C. Nony, «Entretenir la flamme», *L'Équipe,* 24/08/2021, p.2.
71 S. Cluzel, «Sur les Jeux Paris, on a de très gros enjeux», *L'Équipe,* 23/08/2021, p.30.
72 France finally won 54 (11 gold, 15 silver and 28 bronze), ranking 14th among nations. It had obtained 28 in Rio in 2016 (9 gold, 5 silver, 14 bronze) where it ranked 12th among nations.

73 S. Cluzel, «Sur les Jeux Paris, on a de très gros enjeux», *L'Équipe,* 23/08/2021, p.31.

74 The article «À la recherche de la génération 2024 [*In search of the 2024 generation*]» (*L'Équipe,* 23/08/2021, p.31) is a good example of this line aiming to highlight the work of French sport agencies to "allow a young generation to emerge" or "scout Paralympic talents".

75 Boccia is one of the 22 Paralympic competitions: a sport of precision, played with leather balls, close to *boules* sports.

76 The latter was a polio victim during infancy.

77 https://news-24.fr/le-robot-tt-facilite-par-sai-ma-aide-a-creer-lhistoire-aux-jeux-paralympiques-declare-bhavina/

78 M. Ventouillac, «Paris prend la main», *L'Équipe,* 06/09/2021, p.26.

79 É. Thibois, general director of Paris 2024, reminds us that ambition is identical for both, even if the Paralympics will be shorter (12 days against 17), will include fewer athletes (4 500 against 10 500) and involve fewer volunteers (15 000 against 30 000) than the Olympics.

80 M. Ventouillac, «Paris prend la main», *L'Équipe,* 06/09/2021, p.26.

81 C. Nony, «Hâte d'y être», *L'Équipe,* 06/09/2021, p.27.

82 M. Ventouillac, «Paris prend la main», *L'Équipe,* 06/09/2021, p.27.

83 *Idem*.

84 J.-P. Augustin et P. Gillon, *Les Jeux du monde. Géopolitique de la flamme olympique,* Paris, A. Colin, 2021, p.167.

85 R. Richard et al., «Construire et assurer l'héritage des Jeux olympiques et paralympiques. Pour une inclusion sportive durable des personnes vivant des situations de handicap», *Mov Sport Sci,* 107, 2020, pp.41-52.

86 J.-P. Augustin et P. Gillon, *Les Jeux du monde. Géopolitique de la flamme olympique,* Paris, A. Colin, 2021, p.185.

87 *Idem,* p.186.

88 S. Ferez et al., "Inclusion through Sport: A Critical View on Paralympic Legacy from a Historical Perspective", *Social inclusion,* 8(3), 2020, DOI: 10.17645/si. v8i3.2735